

# 教宣 せぶん

## ある後輩の結婚式

数年前に、この仕事をしている後輩の結婚式によばれました。手づくり感のある、心のこもった、ほのぼのとした結婚式でした。最後に挨拶に立った新郎は、特社時代の先行き不安感から来る心の葛藤をみんなの前で吐露しました。そして、晴れて正社員になり、伴侶を迎え、希望をもって、いま新しい人生のスタートラインに立っている旨の話しをしました。その話しを耳にした時、何年か前「自分もまったく同じ不安感を抱えていた」ことを思い出しました。正社員に登用されるとわかった時の「安堵感」「達成感」も甦ってきました。嘘・偽りのない正直な後輩のその一言ひとことに、思わずもらい泣きしたのを覚えています。

私たちは一般的な正社員と違い、期間の違いこそあれ、それぞれが登用期間を経て正社員になっています。特社期間と呼ばれるその登用期間では多くの仲間が去っていきました。明日の保証もない不安定な身分の中、将来の「夢」「未来像」「安定」を求めて、誰もが歯を食いしばってこの苦しい時期を乗り越え、今日を迎えているはずですが、学業成績や面接、筆記試験だけで、正社員に採用された人たちとは「正社員」に対する「思い入れ」や「こだわり」が、はるかに強いと言っても過言ではありません。

いま、その「正社員」という身分が会社都合で奪われようとしています。会社は「言い逃れ」として「雇用の道は確保している」と言うのでしょうか。しかし、雇用を残すというその道は何も具体的なものが明らかにされていません。これは協議していくから決まっていけないのではなく、会社が「雇用」の道を真

剣に考えていないからです。その上で、「判断」だけを早急に求めています。会社の「判断」とは、私たちが代理店への道に転進させることしかありません。

会社は私たちが苦勞してつくってきた「保有」を簡単に手放せないことを知っています。また仮に私たちが「雇用」の道を選んだとしても、この狡猾な経営が私たちに明るい未来を用意しているとは到底思えません。処遇を下げたり、嫌がらせをしたり、転勤を命じて、好きなように料理するのでしょうか。ふたつの道が用意してあるのは法廷対策で、実際は、道はひとつしかないのです。ですから、今回の暴案は決して1事業部門の閉鎖ではなく、私たちに対する退職勧告なのです。

いま働くものがひとつになりましょう。枠組みは何でも構いません。それぞれのポジションで、白紙撤回にむけて立ち上がりましょう。正社員への登用が決まったあの「安堵感」「達成感」を共有する私たちにならできるはずです。

そして狡猾な経営に私たちの正社員に対する「思い入れ」「こだわり」の強さを主張しましょう。特社時代の「苦勞」を共有する私たちにならできるはずです。

1000人に満たない集団ですが、たたかって「奇跡」を起こしましょう。